＜研究論文＞

ジェネラティビティを誘発する環境としての伝統行事
Traditional event as an environmental factor inducing generativity

神藤貴昭* ・ 久木山健一**　　SHINTO Takaaki* ・ KUKIYAMA Kenichi**

1　ジェネラティビティを誘発する環境

本稿では、地域住民が地域の子どもを育てる際に重要となる環境を、ジェネラティビティの観点から考えたい。ジェネラティビティ(generativity)は、「生殖性」「世代性」「世代継承性」などと訳される、エリクソン（Erikson, E. H.）の造語である。エリクソンのライフサイクル理論（Erikson ,1959）では、成人期の「親密性 vs 孤立」に続く発達課題として、「ジェネラティビティ vs. 停滞」が設定されている。エリクソン（Erikson,1959）は、端的にジェネラティビティを「主として次の世代を確立し、導くことへの関心である」とし、このような欲動を「子孫に向けるのではなく、利他的な関心や創造性のような他の形式に向ける人もいる」としているように、子孫を育てることのみを示す概念ではない。むしろ、「単に子どもがいる、あるいは子どもが欲しいと思っているという事実だけで、ジェネラティビティの証しにはならない」(Erikson, 1959）と述べている。したがって、先に引用した定義にみられる「関心」が大きな意味をもつと考えられる。

では、「関心」があるとは、どのような状況であろうか。エリクソン（Erikson, 1959）は、「ある種の信頼、ある種の『人類への信頼』」が、「子どもを、地域社会の歓迎された授かり物として見せるのである」と述べている。「信頼感」に支えられたジェネラティビティは、成人から次世代への一方向的、統制的な感情の流れではない。鑪（2018）は、ジェネラティビティ概念について「世代と世代の生き生きとした交流という関係をとらえようとしている」と述べ、背後に「相互性」（mutuality）が構想されているとしている。相互の信頼感のもと、「生き生きとした交流」の中で、成人の心の中に潜在的に存在する、次世代と関わりたいという感覚が刺激され、ジェネラティビティと呼ばれる欲動が生成され、その中で次世代に受け継ぐべきエッセンスが継承されていくと考えられる(以下、この過程を端的に、ジェネラティビティの感覚が刺激、生成される過程、とする）。「相互性」という意味では、先行世代だけではなく、次世代の側もジェネラティビティの「歯車」をまわす重要な主体となる。

ジェネラティビティの感覚を刺激、生成するような「生き生きとした交流」（鑪、2018）があり、「子どもを、地域社会の歓迎された授かり物として見せる」(Erikson, 1959）ような場や機会は、現代社会において用意されているのだろうか。以下、そのような場や機会を「ジェネラティビティ誘発環境」と呼び、その様相を考察していきたい。

2　「ジェネラティビティ誘発環境」に関わる研究

(1)　ジェネラティビティ測定尺度

これまで、ジェネラティビティを測定する心理尺度が開発されてきている。これらの尺度には、ジェネラティビティの感覚そのものを純粋に問うものと、「ジェネラティビティ誘発環境」に触れそこでの行動を問うているものがある。前者については、例えば、McAdams & de St. Aubin (1992)による LGS（Loyola Generativity Scale）、丸島・有光(2007)による GCS-R（改訂版日本語版世代性関心尺度）、村山ほか（2022）による JGS-R（改訂版世代継承性尺度）があり、これらはおおむね場面に関わらない心理や行動を測定する項目群となっている。

他方、後者については、丸島・有光(2007）による GBC-R(改訂版日本語版世代性行動尺度)があり、「仕事（職場）」「講演や発表」「趣味」「先祖のまつり（法事など）」「お墓参り」「大事な行事（誕

*　立命館大学（Ritsumeikan University）
**　神戸女子大学（Kobe Women’s University）

生日、入学式、敬老の日、祭り）」という場面について尋ねる項目が含まれている。これらの場面は本稿でいう「ジェネラティビティ誘発環境」と想定されていると考えていいだろう。これらのうち、特に「祭り」、場合によっては「先祖のまつり（法事など）」については、地域の人たちが広く関わって子どもを育てるという状態につながる「ジェネラティビティ誘発環境」であろう。祭りや年中行事は、先行する世代から受け継ぎ、次の世代に継承していくものであり、その意味では世代継承そのものの現象である。三隅（2022）は、新型コロナウイルス禍のもとでも、祭礼のルーティンを守る力が働いたことについて、イベント等と異なって、「『世代継承性』の論理に支えられているから」であると考察している。そのような「論理」がどのように働くのか、心理学的にも検討していくことが重要であろう。

なお、GBC-R の基になったと思われる McAdams の GBC（Generative Behavior Checklist）には、「ボランティア」「日曜学校」「地域コミュニティや近所の会合」「教会の集会や活動」「政治的活動や社会的活動」「パーティ」「慈善事業の催し」など（訳は大野ほか（2018）による）の文言が項目に含まれており、これらが「ジェネラティビティ誘発環境」と想定されていると思われる。

(2)　特定の環境に注目した研究

ジェネラティビティに関する諸研究については、岡本ほか（2018）が幅広く、内外の膨大な研究を概観しており、以下、そこでレビューされている研究から、特定の「ジェネラティビティ誘発環境」を想定していると思われるものを抽出してみたい。なお、家庭、職場というような大まかな領域を設定しているものは除くこととする。以下、岡本ほか（2018）に掲載されている、各レビューから、どのような環境が取り上げられてきたかみていきたい。

まず、宇都宮・渡邉（2018）の高齢期・定年退職期に関するレビューでは、家族でのレジャー、非営利活動のボランティアや個人指導プログラム、世代間サービスラーニング、10 代の少年と交流する高齢男性のためのメンタープログラム、エルダーホステル、余暇活動、筆記グループ、小学校でのボランティア、高齢者向け大学プログラム、コンピュータ・トレーニング・プログラム、ビジュアル・アートへの取り組みなどがあげられている。また、平石ほか（2018）の成人期に関するレビューでは、特定の宗教の信仰、青少年に関与する仕事やボランティア、子育て、高齢者介護、作曲、環境保護活動、生産的活動（スポーツ、気晴らし活動など）、フェミニズム・平和活動、語り部の活動、瞑想、聖職者活動などがあげられている。杉村ほか（2018）の青年期に関するレビューでは、ペット飼育、インターンシップにおける地域社会活動、地域のボランティア活動などがあげられている。児玉ほか（2018）のキャリアに関するレビューでは、ボランティア活動、Wikipedia 編集者、メンタリングセンター従事者、フードバンクボランティア、コミュニティのリーダー、学校教員のメンター、大学アドミニストレーターの批判的内省活動などがあげられている。

以上を概観すると、ボランティアや各種プログラムにおけるジェネラティビティの様相についての研究は多いが、地域の祭礼や伝統行事におけるジェネラティビティの様相を検討した研究は少ないと思われる。

(3)　「伝統行事」とジェネラティビティ

ジェネラティビティの感覚を刺激、生成し、「子どもを、地域社会の歓迎された授かり物として見せる」（Erikson, 1959）ようになる場として、わが国で継続して設定されている場を考えると、先にも指摘した、祭礼や年中行事があげられるが、これまでジェネラティビティとの関係は、あまり検討されていないといえる。祭礼や年中行事に関して、前述の GBC-R には、「先祖のまつり（法事など）を家族と、また親族を招いて行った」「家庭、職場、また地域の関係での大事な行事（誕生日、入学式、敬老の日、祭り）に参加した」という項目がみられる。しかしながら、これらは祭礼や年中行事を単独でとらえるような項目ではないし、祭礼や年中行事の意義についての検討は特にはなされていない。なお、丸島・有光（2007）に「日本の文化的背景における成人の日常生活を念頭において 3 名の研究者が項目を新たに考案し」とあり、これらの項目は、このような考えから改訂時に付加されたと思われる。

祭礼や年中行事には、子どもが何らかの形で参加することが多いと思われる（天野、1996； 大森、2000）。ここで、祭礼や年中行事とはどういうもの

か、その定義について検討する。従来、祭礼や年中行事については、民俗学の分野で扱われることが多い。実際、「講座日本民俗学」（全5巻、朝倉書店）には『行事と祭礼』という巻（第3巻、2021年）が存在し、民俗学の中でも重要な研究領域となっている。

祭礼、祭り、年中行事の区別は、厳密には困難である。民俗学分野でよく引用される柳田国男『日本の祭』所収の「祭から祭礼へ」（柳田、1969）によると、祭礼は「祭の一種特に美々しく花やかで、楽しみのおおいもの」「見物というものが集まってくる祭」とし、「見物」に関して、「祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的の立場から、この行事を観望する者の現れたこと」が日本の重要な一つの変わり目としている。「見物」がなければ「祭」で「見物」があれば祭礼となる。また、石井（1997）が「柳田が『節句』ではなくて『節供』であることを強調したように、年中行事は本来神祭りであって、『家々で神をまつるべく静かに忌みつつしんで籠り、神供を設けてこれを人びと相共にいただく』ことを中心に成り立った行事である」と述べるように、年中行事も祭りである。

「民俗学は神を解明する学問である」（小松、2002）と定義する研究者もいることから考えると、民俗学の中心的な研究対象である、祭礼や年中行事には、個々の参加者の意識の程度はあれ、「神」と呼ぶべき、聖なるものが想定されていると思われる。これは地域での運動会などのイベントとは異なるものである。

以上のように、祭礼、年中行事は、神（聖なるもの）を想定して、伝統的に受け継がれてきた行事であると定義でき、本稿ではこれらをまとめて「伝統行事」と呼ぶこととする。なお、神（聖なるもの）とは、神仏、先祖等に関わる、敬意あるいは畏れを多少とももつようなもので、ある程度歴史的に、地域住民に共有されているものであろう。町内会の会合や運動会、家庭での団らんなどになく、「伝統行事」にあるものは、神（聖なるもの）である。各種「伝統行事」は、各住民が信仰する宗教は様々であっても、ある程度、尊重するべき行事と考えられている（そのように考えない自由があることも重要である）。神（聖なるもの）、尊重すべきものの存在が、ジェネラティビティの感覚の刺激、生成にどのように関わるかという点は、「伝統行事」とジェネラティビティの関係を考える上で重要である。

3　これまでの研究にみる「ジェネラティビティ誘発環境」としての「伝統行事」の機能

以下、地域における「伝統行事」を検討した研究、中でも子どもと大人が関わる様相に言及している研究に着目し、ジェネラティビティという観点から読み直すことにより、「伝統行事」が「ジェネラティビティ誘発環境」としてどのように機能しているかをみてゆく。先に結論を述べると、「伝統行事」は大きく2つの機能を有すると考えられた。1つは、異世代認識の強化、異世代の存在を認めるという機能、いわば広い意味の世代継承である。いま1つは、「伝統行事」に関わる特殊な技術や作法の伝承というような、いわば狭い意味の世代継承である。なお、レビューする各研究での「伝統行事」の様相は、当然、研究発表当時の状況であり、現在では、変容している可能性がある。

(1) 広い意味の世代継承の場としての「伝統行事」

まずは、「伝統行事」がもつ、異世代認識の強化、異世代の存在を認めるという機能、いわば広い意味の世代継承である。地域の人に子どもを知ってもらう、認めてもらうという機能である。

兵庫県篠山市の篠山・春日神社祭礼を担う子どもたちの様子について報告している神原（2019）は、「子どもたちは、祭りは神事であるということ、正座をして、精神を統一して練習しなければならないということを、地域の指導者や先輩から教えられる」とし、「地元の方々に名前も顔も覚えてもらって、折に触れて、支えられ、見守られながら育つことができたり、そして、地元への愛着心や誇りを育んだりと、その意義は計り知れない」としている。

また、石川（2011）は、奄美大島大和村の「豊年祭」と子どもの社会性について検討している。豊年祭の中心は相撲の対戦（幼児から50歳代までの男子）や、棒踊り、八月踊りであり、石川（2011）は、「熱心に行事に参加することで子ども達は集落や年長者からの承認あるいは支持を得ることができる」「種々の儀礼への参加は、集落が伝統的に保ってきた価値観を学ぶ場となる」としている。

関西で盛んに行われている「地蔵盆」は、一般的には子どもが参加する行事として知られている。清水（2011）は、京都の地蔵盆についての宗教史的研究の中で、地蔵盆の基本要素として「①行事に当たって、地蔵像を洗い、化粧等飾り付けを行う②数珠繰り（数珠回し）を行い、子供の安全・成長等を祈る③地蔵の前で、子供が遊ぶ」の３点をあげ、もともと「地蔵に子供の安全を祈るのが地蔵祭」であり、それが「地蔵盆」となったとしている。「地蔵盆」が、子どものことを思い世話をするというジェネラティビティの感覚と合致した行事であることがわかる。

滋賀県の地蔵盆について検討した林（1997）は、「ほとんどの地区では能登川町垣見本町でみたように、『大人がやって子供に遊んでもらう』という形に変化しているようである」「このような変化は、本来的には組織的な形で子供が関わっていなかったための柔軟性が背景にあることによって可能になったということができよう」と述べている。つまり「子供組」のような組織で行っているわけではなかったがゆえに、大人のジェネラティビティの感覚、子どもの世話をしたい、という感覚を刺激、生成できる場となったといえる。

京都市域の全自治会長・町内会長へのアンケート調査（6,627 件配布のうち 3,684 件の有効回収）より、村上（2018）は、「2,902 の町内会、実に市域の 78.8%で地蔵盆が行われている」と報告しており、同市域の多くで「地蔵の前で、子供が遊ぶ」光景が見られることを示唆している。また、村上（2018）は、地蔵盆での活動に関して、回答のあった 90.5%の地区で「お菓子配り」、67.5%の地区で「福引」、59.4%の地区で「一式飾り」、52.1%の地区で「僧侶の読経」が行われているとしており、これらの中で、大人と子どもの交流が行われていると言える。

以上のように、神原（2019）の篠山・春日神社祭礼や、林（1997）、清水（2011）、村上（2018）による京都滋賀地区の地蔵盆の研究においては、異世代認識の強化という機能、石川（2011）の豊年祭の研究では、異世代を地域の一員として認めるという、さらに強い機能があると考えられる。

(2) 狭い意味の世代継承の場としての「伝統行事」

次に、「伝統行事」がもつ、特殊な技術や作法の伝承のような、いわば狭い意味の世代継承である。比較的濃密な関係性の中、年上が教え、年下が教えられるということを通して、世代をつなぐ場という機能である。

田中（1989）は、「ほぼ近世以来宮城県下で維持されている子どもに関する儀礼、祭事、年中行事」について調査している。そのうち、鳴瀬町宮戸月浜の「いんずのわり」（「えんずのわり」）という行事では、神社の岩屋で約１ 週間、子ども組だけで共同生活を続けるという。田中（1989）によると「水汲み、薪割、炊事、片付、使い走りなどすべて一番大将がさい配をふり、働きに対するユーモラスな評価や制裁のしきたりもある」とし、「先輩の後見達も集まってきて、世話をしたり指示したりする」という。また、各行事の調査を通して、田中（1989）は「大人一般の子ども一般に対する“ 社会的働きかけ”」が積極的にあり、「その対応の中で大人自身も学んで」いると考察している。ジェネラティビティにおける「相互性」を連想させる記述である。

また、和崎（1996）は、京都市で行われる、いわゆる五山の送り火のうちの左大文字に関して、様々な角度から考察を行っている。発達的な観点からは、祭礼を担う地域の組織「左大文字保存会」の「準会員」（中学生の３年間）に着目し、和崎（1996）は「大の字を書く字順でいう第 2 画や第 3 画の下方部は、山の急峻な勾配にあって、技術的にみて幾分平易な位置といえる、第１画の平坦地に全員が配される。ここならば、準会員たちも技術習得しやすく、これを起点に馴染んでいきやすいスタートの地点だといえる」と述べ、いわば正統的周辺参加（Lave & Wenger, 1991）の形で、まずは周辺的な活動を行い、年上に教えられつつ、徐々に、正会員になっていく様子が指摘されている。

石川県鳳到群門前町（現輪島市）の山王祭りを対象にし、とくに子どもによる「ヤマ」の組み立てなどの準備過程に着目した川村（2010）は、「小学生、中学生、タイショウ（引用者注・中学３年生）という年齢順の立場の違いと役割分担がある」と述べ、子どもは、伝統的やり方に沿いつつも、自らの状況に合わせて変化させているという。狭い意味の世代継承の場であっても、実際は、より柔軟に継承がなされている可能性があろう。

(3)　「伝統行事」における心理的変容

「伝統行事」への参加は、ジェネラティビティに関わって、子どもたちにどのような心理的変容をもたらすのだろうか。以下、子どもへの調査により、「伝統行事」への参加とジェネラティビティに関わる感覚の関係を捉えたと思われる研究をみていく。

大谷ほか（2006）は、青森市・弘前市内の公立小学校（各市 2 校）の 4 年生を対象とし、青森ねぶた・弘前ねぷたへの意識をアンケートにより調査している。ねぶた・ねぷたの観覧率は、青森市で 96%、弘前市で 95%と高く、また毎年観覧している子どもが、青森市で 75%、弘前市で 61%であったという。また、ほとんどの子どもが、親と観覧していた。大谷ほか（2006）は、「祭りの意識は高く、子どもなりに誇りと自覚を持ち、将来の職業の夢として 25%がねぶた師を抱いていた」としている。

大阪府南部地域の祭礼に青年団の一員として参加する高校生にインタビュー調査を行った尾場（2018）は、「彼らの青年団での生活は、祭礼行事の運営の仕方だけでなく学校では学べないような礼儀についても伝達され、彼らはそのことを肯定的に受け止めていた」とし、この過程を「社会化過程」と捉えている。祭礼にまつわるやりとりを越えて、「青年団」が、より広いジェネラティビティ誘発環境として機能しているといえるかもしれない。

黒田ほか（2021）は、福井県三方五湖地域の中学生を対象にアンケート調査を行っている。その結果、地域の祭りや行事への参加頻度は、「現在の地域社会との関係性」「理想の自然との関係性」「理想の地域社会との関係性」と有意な正の相関を示していた。黒田ほか（2021）は、「地域の祭りや行事へ参加すると、地域の人々との交流が増え、自分が地域の一員であるように感じられると推察された」としている。

また、道信（2017）は、北海道の離島において、ヘルス・エスノグラフィという手法により、祭りにおける子どもと地域の人たちの様子をみとっている。夏の行事の神社祭典において、小学校 4～6 年生の子どもたちが神輿行列、小学校 1～3 年生の子どもたちが手作り神輿をかつぎ、行列の前方では、中学生が神楽を舞うという。神輿は地域を歩き、例えば、グループホームの前で、入所者である老人たちに舞を披露するという。道信（2017）は「島の祭りでは，舞を観て、神輿行列に参加し、集落を踊り歩く子どもの行為が、土地に伝統をつないでいた。子どもにとって祭りは、土地を知り、地域を知る、身体の経験としてある」としている。

郷堀（2011）は、新潟県糸魚川市の小正月行事に参加した子どもたちと、見学した子どもたちに自由記述を求め、テキスト分析を行ったところ、参加した子どもたちにおいて、子どもたち同士や地域住民、昔の人との「つながりの実感」に関する記述が多かったとしている。また、郷堀（2011）は、「地域の住民がオクデサン（引用者中：道祖神の名称）を拝む場面を子どもたちが見ていること自体が伝統文化を尊敬することにつなが」るとし、「すべてを子どもに委任した『学び合い』」とは異なって、「成人との関わりによって信頼関係の形成ないしはその確認」が期待できるとしている。

以上のように、「伝統行事」は、大人や年上から様々なことを学ぶとともに、大人や年上とのつながりや信頼感、地域の一員としての感覚を得るなど、子どもに心理的変容を促すことが考えられる。

(4)　時代・状況による「伝統行事」の変容

ジェネラティビティという概念には、新しいものを生み出す、状況に合わせて変革するという意味も込められている。「伝統行事」にも、例えば、少子化や新型コロナウイルス感染症など、様々な状況に遭遇することにより、そのような様相がみられる。また、学校教育や、新たな企画によって、「伝統行事」を生き生きとさせる試みも行われている。

川崎（2019）は、兵庫県篠山市の城下町地区にある春日神社で行われる秋祭りについて報告している。少子化で、鉾山や太鼓みこしの乗り子を確保するのが困難となり、従来は小学生の男子だけだったが、中学生や幼稚園児を乗せるようになり、さらに、女子を乗せたり、隣町から乗り子を募ったり、アルバイトを雇って乗り子を確保したりしている状況がみられているという。

また、中谷・小伊藤（2012）は、石川県加賀市の地蔵盆の変遷を検討し、「昔は、『子ども主導型』が主流であったが、近年においては、大人の関与が大きくなり『大人補助型』、『大人主導型』へ移行する傾向が見られる」として、「その要因として、少子

化による子ども集団の縮小、普段の遊び集団の矮小化による子どもの行事運営能力の低下とギャングエイジによる集団性の弱体化、等による大人による子どもの関与の強化等が背景にあると考えられる」と考察している。

以上のように、「伝統行事」のエッセンスを残しながらも、少子化という状況に対応していくことにより、「ジェネラティビティ誘発環境」が継承されていくこととなる。

「伝統行事」自体を、学校において本格的に継承していくという試みも見られる。堀内・熊澤(2012)は、石川県奥能登において、小中学校の校長にヒアリングするとともに、小中学生にアンケート調査を実施し、祭礼における伝統芸能の小中学生への継承について検討したところ、太鼓、かね、横笛などに関して、総合的な学習の時間や、放課後の伝承クラブなどで継承していることを明らかにしている。

また、滋賀県長浜市の長浜曳山祭における「子ども歌舞伎」のシャギリ（囃子）の担い手変化とその継承について検討した武田（2016）は、その変化のひとつとして「祭礼集団とは別に学校という回路も活用しつつシャギリが普及して、それまでなら役者候補となるような威信や階層以外の家の女子、また祭礼集団の領域外の子どもたちをも祭礼の場に組みこ」むようになったことを論じている。

さらに、神藤（2021）は、「鳴門教育大学教育と学校を考える会」によって実施された四国遍路（歩き遍路）に参加した小学生における、地域の人たちや他のお遍路さんと交流することによる心理的変容を、ジェネラティビティの観点から検討し、偶然性と文化的制度の重要性を指摘している。

みてきたように、学校教育や、子どもを対象にした企画において、「伝統行事」を組み込み、「ジェネラティビティ誘発環境」を維持するということも考えられよう。

４　地蔵盆の内在的事例検討

次に、伝統行事が「ジェネラティビティ誘発環境」として、様々な抑制要因（都市化、近所付き合いの希薄化、コロナ禍など）の中、どのように維持されているのかについて、コミュニティの内部より内在的に検討したい。具体的には、筆者のうちの一人（京都市在住、以下「筆者」とのみ記載）が、担当者として実施した京都市の地蔵盆の様相について、「ジェネラティビティ誘発環境」という観点から記述し、事例的に検討する。その中で、地蔵盆が、3(1)で示した、広い意味の世代継承の場としての「伝統行事」として機能しているという点を示したい。また、3(2)で言及したようなジェネラティビティ誘発環境の中の心理的変容、3(4)で言及したような時代・状況による変容についても、検討したい。

なお、対象となる京都市Ａ区Ｂ町（市街地）の町内会は、1～5 組があり、各組には 5 軒ほどの家が所属する。高齢者のみの１つの組を除く 4 つの組で、毎年、地蔵盆の番をまわすこととなっている。地蔵盆当番がまわってきた年に、当該組の組長となっている家が、地蔵盆の主担当となる。普段の地蔵の掃除やお供えも行う。地蔵盆の地蔵は、普段は町内の祠にあり、地蔵盆は、地蔵堂の近くにある、集合住宅敷地内で行われる。以下、コロナ禍前の地蔵盆（筆者の家が所属する組が担当、かつ筆者の家が組長で主担当であった 2017 年度）と、コロナ禍の最中の地蔵盆（筆者の家が所属する組が担当、筆者の家は組長でなく主担当ではない 2022 年度）について、当時の記録ノートなどを参照し、素描したい。

コロナ禍前の地蔵盆（2017 年）　この年の地蔵盆（8 月 19 日）の前に、地蔵盆準備の会合を主担当である筆者の家で行った。前年度担当組より、地蔵盆の備品（お供えの食器、座布団など）を預り、各家に分散して保管していた（なお、その際、高齢者のみの家１軒より、地蔵盆参加からの離脱の申し出があり、保管も辞退された）。近所の人は５名ほど集まり、当日の活動と準備についての会議を実施した。地蔵盆当日の時間の流れ、景品の内容、地蔵に供えるごはんとおかずの用意などについてである。地域に幼児が多くなったので、何か子どもが喜ぶようなことをしようということで、ボールあてで景品がもらえるようなゲームをすることとなった。

その後、筆者の家が各方面と交渉することとなった。地蔵設営場所（集合住宅の駐車場）に関しては、前年度と若干場所を変えるなどの交渉があった。また、これまで読経を依頼していた僧侶が高齢ということで、別のお寺を紹介してもらい、僧侶が交代することとなった。ゲリラ豪雨などの不安があり、テ

ントをたてる必要性を感じ、近所の葬儀会館が貸し出しているという話を聞き、これまでは借りてはいなかったが、交渉をして借りることとした。また、地蔵盆のお参りへの誘いの手紙を町内に配布した。

当日、行事は、午前8時半ごろ当該の組の大人が集合し（各家から1～2名）、＜テントを設営する→地蔵・地蔵堂を洗う→地蔵を運ぶ→お供え・飾り付けを行う→子どもが遊ぶ（ボールあて）場をつくる→僧侶を招き入れ、読経。住民は数珠でお祈り→子どもが遊ぶ→住民に景品を分配（子どもはみな小さいこともあり、読経の前あたりから参加）＞という流れでとり行った（写真）。終了は正午付近である。なお、お供え、飾り付けの仕方の写真なども含め、ひきつぎのノートを新たに作成し、後に来年担当の組に渡した。

以上のように、基本は大人が場を設定するが、子どもを巻き込む中で、大人たちが地域の子どもを知る場となった。さらに、普段は忙しい地域の大人もお祈りに来るし、また、何よりも、準備段階も含めて、大人同士が会話することによって、互いの子どものこと、町内の子どものことも含め、地域の動向を知る場となった。これらは、3章で指摘した、異世代認識の強化、異世代の存在を認めるという機能、いわば広い意味の世代継承であると思われる。

<u>コロナ禍の最中の地蔵盆（2022 年）</u>　新型コロナウイルス禍にある2022年度は、筆者の属する組が担当だが、筆者の家が主担当ではないので、各方面との交渉などについての詳細は割愛する。2022 年度の行事（8 月 21 日）は、午前8時半ごろ当該の組の大人が集合し（各家から1～2名）、＜地蔵・地蔵堂を洗う→地蔵を運ぶ→お供え・飾り付けを行う→僧侶を招き入れ、読経。数珠でお祈り→住民にお茶を分配＞という流れで行われた。なお、コロナ禍ということで、行事前にはお参りへの誘いの手紙は配布しなかったし、また、引継ぎ（前年度は地蔵盆非開催）や事前の組での会合などにおいては、当番の組以外からのお参りはないみこみで、お椀に料理は入れないでお供えすることとした。ところが、当日、場所提供者でもある地域の古老から、料理をお供えするべきであるという意見があり、急きょ相談し、料理を用意することとした。また、その老人が地域を歩いて地蔵盆を知らせているのをみて、当番の組以外からもお参りに来られた方もいた。その老人（昔からの住人）の先祖が、川沿いに野ざらしにされていた地蔵をまつった話を皆できくなど、由来をきく場面もあった。このように、老人と、現代の状況にもまれている次世代の、調整が行われた。なお、本町内会は、基本的に子どもを積極的に参加させなかったが（数名は来た）、数十メートル東側で行っている隣町の地蔵盆では、子ども達が多く来て、地蔵の前で長時間過ごしている様子がみられた。

後続の世代は、行事への参加を拒否することもできるが、神的な存在、あるいは地域の先住民から代々続いていることそのものが、第三者的存在（メタ的存在）として、世代間を媒介し、行事のバトンタッチを後押ししていると言える。単なるイベントと異なり、そのような存在が、ジェネラティビティの歯車を動かす潤滑油になっている。

5　まとめと課題

(1)　「伝統行事」のジェネラティビティ誘発機能

本稿では、まず、これまでの「伝統行事」研究の検討（**3章**）により、第1に、「伝統行事」が「ジェネラティビティ誘発環境」として、大きく2つの機能を有すると考えられた。1つは、異世代認識の強化、異世代の存在を認めるという機能、いわば広い意味の世代継承である。これは、特に都市部において重要なことと思われる。いま1つは、技術や作法の伝承というような、いわば狭い意味の世代継承である。第2に、「伝統行事」が、「ジェネラティビティ誘発環境」として、地域の人や子どもに心理的変容をもたらしている可能性が考えられた。第3に、

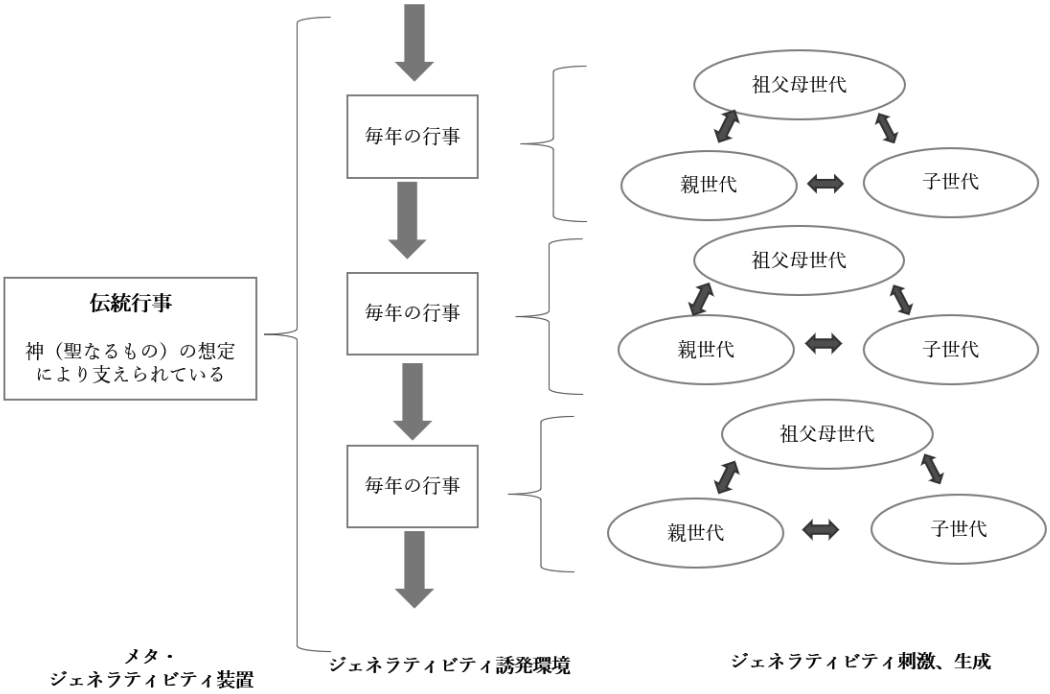

図　「伝統行事」におけるジェネラティビティ誘発の構造

時代・状況により「伝統行事」が変容する中、ジェネラティビティ誘発機能が維持されるように、学校教育を利用するなど、柔軟に工夫されている。

次に、広い意味の世代継承という機能をもつと考えられる、地蔵盆に関して、地域の人や子どもの心理的変容、時代・状況により「伝統行事」が変容する中での葛藤という観点で、コミュニティ内から内在的に事例的検討を行った（４章）。地蔵盆は、広い意味の世代継承の場としての「伝統行事」であり、ジェネラティビティの感覚が刺激、生成される場となっている可能性が考えられた。また、時代・状況にかかわらずそのような場を維持できるようにするための、工夫や葛藤がみられた。さらに、神（聖なるもの）の存在が、第三者的存在（メタ的存在）として、世代間を媒介し、行事のバトンタッチを後押ししていると思われた。

⑵　メタ・ジェネラティビティ装置としての機能

以上のことから、ジェネラティビティという観点からみると、「伝統行事」は、「ジェネラティビティ誘発環境」を世代継承する仕組み、いわば「メタ・ジェネラティビティ装置」であると考えられよう。すなわち、祭礼などの手続きを継承するだけではなく、地域社会集団のジェネラティビティの感覚自体を継承するような装置として機能しているのではないか（図）。

これまでみてきたように、「伝統行事」を支える要素として、神（聖なるもの）が想定されることが多いと思われる。地域住民の間において、神（聖なるもの）を想定することが、年上と年下、大人と子どもを結びつける力、いわばボンドとなっていることが考えられる。なお、個人が信仰する宗教や保持する思想にかかわらず、参加可能な形であることが重要であろう。また、内発的な宗教意識があるほうが、ジェネラティビティを発揮するという研究もあり（Sandage, et al., 2011）、個々の意識の濃淡に影響を受ける可能性もある。重要なのは、神（聖なるもの）への尊重を強制するのではなく、それぞれ相手の中にあるかもしれない神（聖なるもの）への尊重、思いを想像することであろう。

「伝統行事」の多くは、行事当日だけではなく、準備過程においても地域住民が会合を持つと思われ、そこに子どもたちが参加することがなくとも、行事における子どもたちの参加といった話題が話し合われると思われ、一連の流れの中で、ジェネラ

ティビティの感覚が刺激、生成されるだろう。

(3) 学校教育の役割

学校教育で「伝統行事」を教材として扱う事例は多いと思われる。例えば、平成29年3月告示の小学校学習指導要領（第4学年）に「県内の文化財や年中行事は、地域の人々が受け継いできたことや、それらには地域の発展など人々の様々な願いが込められていることを理解すること」「歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承のための取組などに着目して、県内の文化財や年中行事の様子を捉え、人々の願いや努力を考え、表現すること」という記載がある。子どもたちが、「受け継いできたこと」「人々の様々な願い」「保存や継承のための取組」などに注目し、理解や表現をすることは、まさにジェネラティビティにかかわる活動である。

また、伝統行事の見学というレベルでは、例えば、京都市教育委員会(2021)のサイトには、「伝統文化体験事業」として、「子どもたちが伝統文化に親しむ機会の拡充を図ることを目的に、京都市立幼稚園全5歳児を対象に葵祭見学席を設けていただき、葵祭を見学しています」「子どもたちが伝統文化に親しむ機会の拡充を図ることを目的に、京都市立小学校6年生を対象に、特別観覧席を設けていただき，時代祭を見学しています」と記載されている。

さらに、本稿で検討したように、学校教育で「伝統行事」の一部を実際に行うというレベルも考えられるが、特にこのレベルになると児童生徒の宗教的背景や文化的背景に配慮すべきことが多くなろう。

(4) 今後の課題

「伝統行事」が「ジェネラティビティ誘発環境」として、より適切に機能するには、これまで検討してきた中において見えてきたことも含め、いくつかの課題があると思われる。第1に、都市的・現代的な状況（少子化、未婚化、高齢化、共働き）において、「伝統行事」がどこまで「ジェネラティビティ誘発環境」として機能可能かという点である。例えば、「伝統行事」は、増加している成人期以降の未婚者のジェネラティビティの欲求を満たしているかどうか、という点である。また、少子高齢化、共働きの増加という中での、持続可能性の問題である。

第2に、地域住民の多様性尊重の観点である。学校教育で「伝統行事」を扱う場合は、児童生徒の多様性への配慮である。宗教的背景の多様性への配慮、あるいは「伝統行事」にしばしばつきまとう「性役割」に関して、ジェンダー的観点からどのように配慮できるかである。前者については、「伝統行事」の核となる、神（聖なるもの）の存在を、地域でゆるやかな形で、共同的に了解、尊重できるかにかかわる問題である。このような点がネックになった場合、「伝統行事」が持続困難な場合、「伝統行事」に代わるものは考えられるのかどうかということも、大きな課題となろう。神（聖なるもの）そのものよりも、それを大事にしてきた先人の尊重ということが重要かもしれない。

第3に、「伝統行事」は、その準備なども含めると長期にわたって活動することになることもあるが、基本的には、年に1回の開催であり、「ジェネラティビティ」にどれほどの効果があるか、という点である。特に、都市部のように、普段は地域で顔を合わさないような関係性がある中では、「ジェネラティビティ誘発環境」とまで言えるかどうかという点である。ミクロ場面での相互作用だけではなく、長期的な調査が不可欠であろう。

文献

天野武 1996 『増補版　子どもの歳時記ー祭りと儀礼ー』岩田書院

Erikson, E.H. 1959 Identity and the lifecycle. Psychological issues Vol. 1, No.1. New York: International Universities Press.（エリクソン，E.H.、西平直・中島由恵訳 2011 『アイデンティティとライフサイクル』 誠信書房）

郷堀ヨゼフ 2011 「小正月行事に参加する子どもの行動と意識に関する一考察」 『日本民俗学』 265，57-71.

林英二 1997 『地蔵盆―受容の展開の様式―』 初芝文庫

平石賢二・上手由香・木谷智子・井川ひとみ・日潟淳子・石川智子・森田修平・高野恵代・神谷真由美 2018 「成人期の世代継承性」 岡本祐子・上手由香・高野恵代（編著）『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』 ナカニシヤ出版 177-279.

堀内美緒・熊澤栄二 2012 「奥能登珠洲における小・中学生への祭礼文化の継承の実態に関する研究」 ランドスケープ研究 75(5)，581-586

石井研士 1997 「非聖化する家族と儀礼文化の衰退」 小松

和彦編『祭りとイベント』小学館 39-66.
石川雅信 2011「子どもの社会性と年中行事― 奄美大島大和村の豊年祭の事例から」 日本教材文化研究財団研究紀要 41, 87-91.
川崎和也 2019「地方都市の祭りにおける祭縁としての社会関係―兵庫県篠山市・春日神社の秋祭りを事例として―」 現代社会研究（神戸学院大学） 5, 140-157.
神原文子 2019「篠山・春日神社祭礼を担う子どもたち―その現状と課題―」 現代社会研究（神戸学院大学） 5，158-172.
川村清志 2010「祭りの習得と実践: 子どもによる準備過程を中心に」 比較文化論叢（札幌大学文化学部紀要） 25, 7-54.
児玉真樹子・新見直子・森田修平・高野恵代 2018「キャリアと世代継承性」 岡本祐子・上手由香・高野恵代（編著）『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』 ナカニシヤ出版 299-326.
小松和彦 2002『神なき時代の民俗学』 せりか書房
黒田琴絵・小川みふゆ・吉田丈人 2021「人と自然および人と地域社会の心理的関係性とそれに影響する属性および習慣的要因：自然再生が進む地域の中学生を対象とした分析」 日本生態学会誌 71,105-122.
京都市教育委員会 2021 伝統文化体験事業 (https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000156754.htm 2021年5月31日の日付あり)
Lave, J. & Wenger, E. 1991 Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation, Cambridge: Cambridge University Press 佐伯胖(訳) 1993『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』 産業図書
丸島令子・有光興記 2007「世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性，妥当性の検討」 心理学研究 78, 303-309.
McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. D. 1992 A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. Journal of personality and social psychology, 62, 1003-1015.
道信良子 2017「島の子どものウェルビーイング」 発達心理学研究 28(4), 202-209.
三隅貴史 2022「祭礼と文化継承」 鳥越皓之・足立重和・谷村要（編著）『コロナ時代の仕事・家族・コミュニティ』 ミネルヴァ書房 195-212.
村上忠喜 2018「「地蔵盆」に関するアンケート調査結果」 京都市文化財保護課研究紀要 創刊号, 113-129.
中谷崇・小伊藤亜希子 2012「地蔵盆にみる異年齢集団による子どもの発達環境―加賀市の南郷地区・大聖寺地区を事例として―」 生活科学研究誌(居住環境分野)（大阪市立大学） 11, 19-31.
村山幸子・小林江里香・倉岡正高・野中久美子・安永正史・田中元基・根本裕太・松永博子・村山陽・村山洋史・藤原佳典 2022「改訂版世代継承性尺度（JGS-R）の作成と信頼性・妥当性の検討」 パーソナリティ研究 30, 151-160.
尾場友和 2018「地域の社会活動に関わった高校生の生活と認識世界―祭礼行事を担う青年団の活動を中心に―大阪商業大学教職課程研究紀要 1(1) 29-36.
岡本祐子・上手由香・高野恵代（編著） 2018『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』ナカニシヤ出版
大野久・三好昭子・茂垣まどか・今井美智子・赤木真弓 2018「McAdamsによる世代継承性に関する研究」 岡本祐子・上手由香・高野恵代（編著）『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』ナカニシヤ出版 108-132.
大森惠子 2000「子供をめぐる民俗－但馬の行事と民間信仰」八木透（編）『フィールドから学ぶ民俗学 関西の地域と伝承』昭和堂 267-286.
大谷良光・立田健太・井上怜 2006「青森ねぶた・弘前ねぷたの子どもの関わりと意識-青森市・弘前市内小学校４年生を対象とした調査-」弘前大学教育学部紀要 96, 51-60.
Sandage, S. J., Hill, P. C., & Vaubel, D. C. 2011 Generativity, relational spirituality, gratitude, and mental health: Relationships and pathways. The International Journal for the Psychology of Religion 21(1), 1-16.
清水邦彦 2011「京都の地蔵盆の宗教史的研究―祖霊観解明の一手がかりとして―」 比較民俗研究 25, 74-90.
神藤貴昭 2021「ジェネラティビティの生成過程―学校教育への示唆―」 立命館実践教育研究 3, 31-40.
杉村和美・徳岡大・西田若葉・日原尚吾・梶山希見・金龍熙 2018「青年期の世代継承性」 岡本祐子・上手由香・高野恵代（編著）『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』 ナカニシヤ出版 281-297.
武田俊輔 2016「都市祭礼における周縁的な役割の組織化と

祭礼集団の再編―長浜曳山祭におけるシャギリ（囃子）の位置づけとその変容を手がかりとして―」 年報社会学論集(関東社会学会) 29, 80-91.

田中弘子 1989 「近世・子どもの行事にみられる日本人の教育観　宮城県下の事例を中心に」 仙台自白合短期大学紀要 17, 49 -65.

鑪幹八郎 2018 「Erikson の「ジェネラティビティ」概念の基盤―精神分析理論と Erikson の人生―」 岡本祐子・上手由香・高野恵代（編著） 『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』ナカニシヤ出版 21-29.

宇都宮博・渡邉照美 2018 「高齢期・定年退職期の世代継承性」　岡本祐子・上手由香・高野恵代（編著） 『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』ナカニシヤ出版 133-175.

柳田国男 1969 『日本の祭』 KADOKAWA

和崎春日 1996 『大文字の都市人類学的研究 左大文字を中心として』 刀水書房